惑星の民衆をいとおしみ
「明日の風景」を語る人
池山吉彬第六詩集『惑星』に寄せて

鈴木比佐雄

1

池山吉彬さんの詩篇を読み始めると、風が凪いでくるように心が静められてくる。池山さんはきっと様々な格闘を内面に鎮めて、その痕跡の痛みを独特なリズムで奏でているのではないか。そのリズムは私たちの心に触れて、静かな悲歌となって響いてくるのだ。池山さんは一九三七年に長崎市に生まれた。私家版の詩集『夏のひかり』は、一九七六年に刊行されているが、その詩集の中に「白い闇」という詩がある。

白い闇

その朝
蒼ざめた歴史の縁側に立ち
ぼくはぼんやりと外を見ていた
玩具のようなパラシュートが　ふたつ
やがて世界にその名を知られることになる
不幸な都市の空に浮かんでいた
「正義」の旗はいつでも
膨大な狂気の風を孕んでいる
ぼくらの頭上で
突如　炸裂した白い闇

四つの島の運命を染めて
都市は赤黒く炎上し
醜悪な雲の下
数えつくすことのない死を生んだ

……
荒涼とした現代の廃墟に
冬瓜（とうがん）のように膨張した顔が転がり
首のない　黒焦げの腕が土をつかむ
ぼろぼろに千切れた魂を引きずって
よろめき歩く亡霊の衣に
悲鳴が　屍臭のようにすがりつく
赤錆（あかさび）色の川には嬰児が流れ
野良犬のむくんだ腹にぶつかると
ゆっくり　あおむけに沈んでいく
……
ざらざらした放射能の風を浴びて
そこでは　時間さえ
ビイドロのように融けはじめる

ヤドカリに似た頭巾を被り
少年期のやせこけた顔を歪めて
ぼくは言葉もなく震えつづけた
塩水のにじむ暗い穴で――
飢えと悲惨にふちどられた
ぼくらの夜明け
翼を失った天使の頬に
鼻の削げ落ちたペテロの肩に
いまも　パックリとひらく傷口は
けっして風化することのない
ぼくらの時代の黙示なのだ

この「白い闇」には、国家の戦争によって最終的に最も過酷な運命を迎えた長崎の人びとの真実の叫びが、冷静にリアリズムでありながら世界的な視野を持ち想像力を駆使して語られている。「冬瓜（とうがん）のように膨張した顔が転がり／首のない黒焦げの腕が土をつかむ／ぼろぼろに千切れた魂を引きずって／よろめき歩く亡霊の衣に／悲鳴が

屍臭のようにすがりつく」。このような被爆後の長崎の街の光景が、眼の前でゆっくりと立ち上がってくるような臨場感は、池山さんの詩の最大の特長だろう。何度も繰り返し甦ってくる長崎の街の悲劇が、池山さんの精神と肉体を通してこのような詩に結実した。三十代後半の池山さんはどうしても長崎原爆について書かざるを得なかったのだろう。なぜなら池山さんの当時十五歳の長兄は、爆心地から二㎞前後で全身を被爆して奇跡的に命は助かったが、その後も長崎で暮らして五十一歳の時に癌で亡くなった。姉も兄を探すために翌日市内に入り入市被曝した。池山さんの家は、爆心地から約九㎞地点の茂木にあったが、窓ガラスは割れて玄関レールは曲り「まばゆい光に包まれた」と後の第五詩集『都市の記憶』で語られていた。「白い闇」とは「まばゆい光」のことを指しているのであり、池山さんには決して消えることのない闇を孕んだ光なのだろう。

その後、池山さんは一九八八年に第二詩集『ジュニペラス・バージニア』を刊行した。その中に兄の死を記した詩があるので引用する。

儀　式

——または兄の死

文字盤に赤いランプがともり
ぼくたちは立ち上がった
あなたに逢う時がきたのだ

部屋は　レストランのように明るく清潔で
中央には長方形のステンレスの盤台
そのまわりに
正装の人々が集まったようすは
どう見ても　今はやりのカクテル・パーティ

ボーイのような白い服を着用した
オンボウ氏の声で
ぼくたちはみな　いそいそと箸を取り上げた
盤上には　大小さまざまな骨が
うずたかく積まれ
どれも灰ひとつなく
磨き上げたようにピカピカに光っている

かつてあなたであったものの一片を
血の濃い順にひとりずつ
ぼくたちは拾い
拾っては骨壺に納めた
　　コチラガ頭部
　　ソチラガ足ノ部分デス
白い服の男は慣れた手つきで
てきぱきと指図をするのだが
骨は一様に細かく砕かれ

どれが　あの
はにかみがちな眼のあたりか
ぼくにはすこしも見当がつかないのだ

それら　つるつるとした無機質の塊には
白い光を浴びて
八月の街を彷徨したあなたの恐怖
二日二晩あえぎ通した
あなたの臨終の苦しみの
どんな刻印も打たれていない
炎が背筋を焼いた瞬間から
あなたはもうきっぱりと
幽明　境を異にしたにちがいない
とり残されたぼくたちにとって
ぶざまに箸を取り上げる　それ以上の
いったい　何ができただろう

晩餐の後の食卓でもかこむように
盤台をかこんで
親族一同　眺めるなかを
スコップ片手に　オンボウ氏は
余った骨をかき集めて
ザクザクと
骨壺に押し込んだ

オンボウ氏とは「穏坊」とか「穏卍」といった死体を焼いた墓守の現代版だろう。そのオンボウ氏によって兄の火葬が手際よく行われていく様に戸惑いながら、被爆しても生き続けた兄の壮絶な人生を振り返り、兄の背負っていた苦悩が骨の中に現れていないかを凝視している。池山さんにとって兄の被爆は家族の被爆であり、兄は自分や兄弟など家族の代わりに被爆してくれたのではないかという思いを抱いていたのではないか。そんな兄の存在を葬ることの躊躇いがゆっくりとした詩行のリズムに現れている。私には池山さんの兄への畏敬や敬愛の念が、いつしか日本人が戦後を迎えるための犠牲となった広島・長崎でその年に被爆死した二十二万五千人余りの人びとへの畏敬の念につながってくる思いがしてきた。そして生き残った数十万人の人びとの一人であった兄を通して、ハンデを背負って生きる被爆者の思いを記そうとしたのではないか。また被爆者を葬ることの無念さや「生き残ったぼくたち」の贖罪の気持ちを池山さんは、書き記さなければならなかったのだろう。その意味で池山さんは、長崎を離れてもいつも兄や姉たちを含めた被爆者たちの傍らで生きようとして、死後も被爆者を決して忘れることなく、被爆者を作り出した世界の構造の悲劇を問い続けている詩人なのだ。

2

一九九八年に刊行された第三詩集『林棲期』は、三章に分かれ三十篇が収録されているが、その後に第二詩集から十四篇、第一詩集から十二篇が再録され、エッセイも四編ほど収録されている。池山さんは、長崎から上京し早稲田大学を卒業し国語の高校教員になった。この詩集を刊行する頃に教師を定年退職し、その記念としてこの詩集をまとめたという。一教員としてだけでなく教頭などの学校運営に関わる職務を勤めながらも高校生たちに長崎原爆の悲劇を語り継いできたそうだ。生徒たちの心には、きっと池山さんの体験が眼に見えるように伝わっていったに違いない。池山さんが教師になろうと思った秘かな動機には、長崎原爆の悲劇を伝えたいという願いがあったろう。生徒たちに伝えてきた教師生活が終わり、長崎原爆の被爆者たちの内面や、世界中の戦争に翻弄されてきた民衆の痛みを本格的に詩篇に刻もうと考えたのだろう。その『林棲期』の中に「朝起きて」という詩がある。この詩は池山さんの後の詩の展開を予感させる詩だ。

朝起きて

朝起きて顔を洗う
昨日の匂いを消すために
思えば幾たび顔を洗ったことだろう
新しい朝を持つために

阿修羅よ
ひとの生がはてしない愚行の連鎖だと
思いたくはないし
歴史もまた過ちをくりかえすと
信じたくもないのだが

阿修羅よ
千年の時空を超えて
今もみつめつづけているお前の眼が
ときおり　私の心をひるませる

三つの顔と
六本の腕を持つ阿修羅よ
瓔珞に飾られたその胸が
かなしみのために張り裂ける
そんな瞬間がきっとあったにちがいない
お前を取り巻く影が夜よりも深いのは
そのためだ

朝起きて顔を洗う
それでも洗いつくせない顔があるのだ
一九三七年一二月・南京
一九四五年八月・広島　そして長崎……

……一九八九年六月・天安門
それら　われわれの無惨な足跡と
かえらぬ
おびただしい死者たちのために
阿修羅よ
しずかなる　しずかなる祈りをいのれ

池山さんは、朝起きて自分の顔を洗いながら阿修羅を思い出し、人間の「愚行の連鎖」を阿修羅がどう見つめているかという問いを発している。そして一九三七年に日本軍が犯した中国・南京への加害行為を考え始める。それから家族を巻き込んだ広島・長崎の原爆体験に至りつき、様々な第二次世界大戦以後の戦争を想起し、一九八九年六月・天安門事件を記している。私は二〇〇九年三月一〇日に『大空襲三二〇人詩集　１９３７～２００９年』を多くの詩人たちのご支援で刊行することができた。この詩選集の第一章「海外／戦中」の冒頭には日本軍が一九三七年から開始した北京、南京への空爆、また一九三八年から五年半も続けた重慶爆撃などを経験した中国の詩人たちの詩篇から始まっている。日本人の加害者だったことを不問に付して東京大空襲などの空襲・空爆、そして原爆を語ることは出来ないからだ。池山さんも同じような考えを持っていることがこの詩を読めばよく分かる。人間の愚かな行為を見つめている阿修羅の眼差しを意識しながら、歴史的に世界的な観点から詩作を試みていることが読み取れる。

二〇〇三年に刊行された第四詩集『精霊たちの夜』の中に「ヨード液色の夜」がある。この詩には被爆者を家族に持った実相が描かれている。

ヨード液色の夜

部屋のどこか底のほうで
鋭い硬質な音がして
驚いて飛び起きる

夜の畳に
母がすわっている
右手に銀色のピンセットが光り
そのむこうに
裸形の兄の背が揺れている
母はその土気色の肉に埋め込まれた
ガラス片を抜いているのだ
着物の糸を抜き取るときの
あのたんねんな手つきで
抜き取るのだったが
白い光の毒を浴びた背からは

取っても取っても
細かい破片が次々と生まれてくるのだ
油紙をはがした腕はだらりと垂れ
ヨード液で黄色くくすんでいる
夜はまだ深いのだろうか
まるで虚無を掬うように
はてしなく作業はつづき
しきりに呼びかけるわたしの声は
けっして届くことがない

鋭い硬質な音がして
わたしは　もう一度
夜の闇のなかに目覚める
そして　すでにこの世にはいないはずの
母と兄の姿を探し求める

池山さんの詩は、余すことなく原爆の悲劇を伝えている。しかしそれだけでなく母が子を思い、子が母に傷を曝け出して身を委ねている聖家族のような瞬間を記している。多くの被爆者たちは即死し、即死しないまでもさすらって瓦礫の中や川辺に身を横たえていった。当時十五歳だった兄は、爆心地の浦上近くにいたにも関わらず幾つかの偶然が重なり奇跡的に生還した。当時八歳だった池山さんは、母が半身ケロイドになりガラスのかけらが入り込み、ヨード液を塗られた兄の身体から、ピンセットでガラス片を丹念に抜き取っている疼きの光景を決して忘れることができないのだろう。放射能被爆の恐ろしさを抱えながら、兄は戦後社会を長崎で五十一歳まで生きたが、内臓の多くを癌で侵されて亡くなった。兄を生かすために母が懸命にガラス片を抜き取るさまは、読むものに兄の疼きと母の愛を同時に感じさせてくれる。そんな二人の姿を永遠に詩に刻もうとして池山さんは

この詩を書き残した。この詩は二〇〇七年に刊行された『原爆詩一八一人集』の日本語版・英語版にも収録された池山さんの代表作として読み継がれている。池山さんはこの詩によって長崎原爆の語り部としての使命を深めていき、次の詩集『都市の記憶』に結実していくのだ。

3

二〇〇七年に刊行された第五詩集『都市の記憶』（二十六篇）の全てが、長崎原爆に関係する詩篇である。池山さんの原爆詩篇の特長は、原爆が炸裂した後に残された被災者たちの痕跡を通して、読み手の想像力を内側から刺激し、原爆投下の意味を自らの問題として考えさせる。同時に極限の人間性を描いた芸術性の高い詩篇なのだ。詩「穴弘法山」を引用してみる。

穴弘法山

少年が山を登っている
水を入れた重箱を抱え
息を切らせている
風は山へ向かって吹きあげ
灰色の煙がもうもうと斜面を覆っている
上の空地には助け出したばかりの
母が倒れているのだ
少年は十四歳
朝の十一時二分には兵器工場にいた
今は穴弘法への坂道
背後では麓の街があかあかと炎上している

何があったのか
なぜ世界が裂け　音を立てて崩れたのか
少年にはわからない

悪い夢のなかにいるみたいに頭がぐるぐるする
燃え残った民家の土甕から汲んできた一杯目の水
一口でいいからと言った老人に
みんな飲まれてしまった
二杯目の水も　子どもを抱いた女にせがまれ
すっかりなくなってしまう
三杯目の今度は　すみません
母に持って行くので　幾度も頭をさげて
寄って来る人たちを必死で追い払い
ぜいぜい言いながら登る

急勾配の道を登りつめたところで
若い女がふたり
寄り添うように歩いてくるのに出遭う
ひとりは顔の半分が赤く焼け
ひとりは頬にガラスの破片が刺さっている
ガラスの女がつくづくと少年を見て
あなたは顔にケガをしていない
とうらやましそうに言う
少年は重箱を握りしめる
だが　ふたりとも水など見向きもせず
ふらふらと遠ざかっていく
ほとんど男女の区別もつかない
ボロボロの布をまとった半裸に近い人も通る
燃えさかる炎に追われて
人は山を這い登るしかないのだ
すれ違うたびに少年は重箱を握りしめる
頭がぐるぐるする

＊穴弘法山――爆心地を取り囲む山の一つ、金毘羅山（三百六十六メートル）の中腹にある寺。長崎高野山穴弘法寺。

池山さんが書き記した長崎原爆詩の中で、最も心に残る詩篇がこの「穴弘法山（あなこうぼうさん）」だ。当時八歳であった池山さんも、逃れてきた被爆者たちをたくさん目撃したのだろうし、家族や被災者たちから多くの話も聞いただろう。それらを総合してこの詩が成立したに違いない。身体が焼け爛れ、ガラス破片が突き刺さったままで山へ逃げてくる多くの人びとを池山さんは、少年の視線で反復し続けているのだ。それは池山さんだけの問題でなく、現在の戦場の子供たちにも当てはまる視線なのだ。冒頭の詩「原子野（げんしや）」には、「いつも／ひとりの童子が立っている」のだ。その一人佇む子供は、「どこからか　白いおにぎりが／とどくのを待っている」のだという。そんなイメージが池山さんの中に甦る時に、「雲からも風からも／透明な力が／そのこどもに／うつれ」という宮沢賢治の言葉を必ず想起するという。池山さんの少年たちを元気付ける精神的な力を賢治から汲み上げていたのだ。詩集『都市の記憶』の二十六篇はどれも個性的な視線があり、とても芸術性の高い長崎原爆の詩集だ。その中でも詩「夕魚（ゆうざかな）」は、「その日の朝　郊外の海で獲れた魚を／背負い籠で漁師の妻たちが売り歩き」した長崎の暮らしを語ることによって、その暮らしを破壊してしまったことの意味を考えさせてくれる。

新詩集『惑星』（三十一篇）は四章から成り立っている。Ⅰ章「八月のブランコ　一九四五年八月の、二つの都市の記憶のために」の五篇は「都市の記憶」を具体的に想起する方法を語っている。冒頭の詩「刻印」では「地表に姿を現わす」骨が「失われた都市の物語」を「しずかに語りはじめ」るのだ。詩「八月のブランコ」も「土地の来歴」を語りだし「数千度の熱で一瞬に焼か

れた無名の人々」の傷をいやすために、「幼な子」が「無垢なるもの」として「世界の端っこから歩いてくる」のだ。Ⅱ章「チャップリンの帽子」十一篇は、戦前の長崎での暮らしや父母や兄弟との思い出が繊細に描かれている。二人の兄、一人の姉と父母に囲まれた団欒の風景が記されている「チャップリンの帽子」は、池山さんの正月用の据え膳に置かれたお椀が「チャップリンの帽子」に似ていたことから、兄たちからチャップリンと渾名を付けられていたという詩だ。チャップリンという名を聞くたびに池山さんは正月の明るい朝の家族に末席に坐っている姿を思い浮かべ、戦前の家族を偲んでいる。Ⅲ章「惑星」九篇は、フィレンツェ、ローマ、パリなどの海外旅行を基にした詩篇だ。小説で読んだボッティチェリを思い描き、カラヴァッジョと路地で想像上の対話をしたり、イラクの権力者の末路やアフガンでの民衆の暮らしを記したり、世界の民衆の傍らに立っている思いがするスケールの大きい詩篇だ。詩集タイトルにもなった「惑星」は、日本のある郊外の「観光道路わきの駐車場で／若い男女七人の遺体が見つかった」ことから始まり、年間三万人以上の自殺者の在りようを直視している。世界は「二〇％の豊かな人びとが／八〇％の自然資源を消費している」現実があるという。スマトラ沖地震で二十二万人が死に、三週間も地球が震えていたことを日本の「国立天文台みずさわ観測所」が実証したことを知り、池山さんは「ふるえる地球／／地球にも／恐怖の感情があるのだ」と語る。練炭自殺した七人の若者の心と地球の「恐怖の感情」が連動し響きあっているかのように書き記していて、私の深層にもある「恐怖の感情」を呼び起こされた気がしている。Ⅳ章「明日の風景」六篇では、世界が「恐怖の感情」に取り込まれつつあるにしろ、その状況下であっても人間は絶望を直視して、新しい情況を切り拓くために「明日の風景」を創りうる存在であることを語ろうとしている。最後の詩「明日の風景」は、3．11で全てを失ってしまった人の心の現実に肉薄しようとしている詩だ。最後に詩「明日の風景」を引用したい。その光景が自らの「明日の風景」でもあることを予言的に池山さんは読者に伝えている。そんな過酷な現実をいかに生きていったらいいのかを問うている。惑星全体をいとおしみ本来的な「明日の風景」を創り出すことを願って書かれた詩篇を多くの人びとに読んで欲しいと願っている。

明日の風景

過去はいつも公開されている
街の図書館の椅子で
きれいにプリントされた過去を
レシピ本かなんぞのように
気楽に　くりかえし読むことができる
だが　一秒先の未来は
世界中のだれにも知らされていない

未来に向かって
足を踏み出すとき
アスファルトは　偶然のように溶けだし
海は　いつのまにか空港を占拠したりするの
　だが
その直前まで
ひとびとは平然とお茶をのみ
だれかと　にこやかに談笑している

傾いたビルディングも
決壊した堤防も

街中に取り残された船たちの
赤い喫水線も
ひとびとには　見えないのだ
こちらの境界にいるかぎり

思いもかけぬ未来へと
不意に　押し出された今日
瓦礫ばかりの砂浜に
言葉なく　うずくまる人がいる
大切なことを
言いそびれたために
沖に向かって叫ぶ人がいる

池山吉彬詩集『惑星』栞解説文
鈴木比佐雄
コールサック社
2011